

高木裕貴氏の発表についての

質疑応答

(質問者 1 名)

【質問】 中川明才（同志社大学）

以下、ご発表の内容に関して、司会者より四点、質問がございます。

1) 論理的エゴイズムについて

ご発表では、カントの『人間学』で挙げられる、論理的・美観的・実践的という、三種のエゴイズムのうち、論理的エゴイズムのみ言及されています。なぜ論理的エゴイズムのみ言及されるのでしょうか。三種のエゴイズムが論理的エゴイズムに集約されうるとすれば、それはいかなる点において集約されるのでしょうか。他者との思想交換が「エゴイズムを打破する」ための方途であるとして、その方途が論理的エゴイズムばかりでなく、いずれのエゴイズムにも有効なのであれば、その有効性の根拠を併せて示していただきたい。

2) 思想交換への動機について

ご発表では、思想交換への動機として、道徳的動機と世界市民的動機を退けた上で、「自然的動機」を採用されています。しかし、道徳的動機に関して言えば、「自分で考えること」の一種と考えられる、各理性的存在者が自らの格律の普遍妥当性を吟味することは、「理性の事実」としての道徳法則に伴う、法則への尊敬によってつねに動機づけられている、とも考えられます。この理解が誤っていなければ、思想交換への動機はともかく、「自分で考えること」に関しては、道徳的動機は有効であるのではないのでしょうか。

3) 「道徳的・自然的最高善」に関するカントの基本テーゼについて

ご発表では、「「交際 (Umgang) において、歓楽生活 (Wohlleben) と徳とを結合させている思考様式 (Denkungsart) が、人間性 (Humanität) である」(VII 277) というテーゼに言及された上で、「道徳的・自然的最高善」の場として「交際」を挙げていることを「注目に値すること」としています。しかしながら、交際への動機を「徳から区別された歓楽生活への傾向性」に求め、そのために「道徳的善」と「自然的善」とを区別することは、「道徳的善」よりも「自然的善」を優先することになり、ひいてはカントの掲げた「道徳的かつ自然的な」「最高善」の理念からの逸脱につながるのではないのでしょうか。

4) 「議論を遊びへと変身させる」ことについて

ご発表では、「談話」の一要素としての「議論」に焦点を当て、かつ遊びと労働を対比させることで、本来は仕事の一種と見なされる議論を、談話の他の要素である世間話と冗談と同様の「遊びへと変身させる」ことを提唱し、そのことが「思想交換」の促進につながることを論述されています。この点に関して質問です。議論は、「社交的食事」における談話の内に含まれるものであっても、それは遊びに転換するよりもむしろ、仕事であり続けることで、談話に緊張感を持たせることになり、かえって道徳性の滋養につながるのではないのでしょうか。その意味においては、「談話と議論のテンション」という表現でもって発表者が問題視されるものは、解消されるべきものなのではなくて、むしろ保持されるべきものなのではないのでしょうか。

【回答】 高木裕貴（京都大学）

まず、ご質問いただき心より感謝申し上げます。以下においてお答えいたします。

1) 論理的エゴイズムについて

まず、本発表が論理的エゴイズムに注目するのは、論理的エゴイズムの打破が啓蒙につながるからです。論理的エゴイズムと他のエゴイズムとの関係性はいままで視野に入れていませんでした。他者との思想交換は論理的エゴイズムの打破に有効である、という結論しか導いていません（原稿ではしばしば「論理的」を省略しています）。もちろん、論理的エゴイズムと他のエゴイズムとの関係性は論及されるべき論点であると思いますが、今のところ、三つのエゴイズムを論理的エゴ事務に集約させることは難しいと考えています。

2) 思想交換への動機について

道徳的動機は、「自分で考えること」への動機として擁護しうる、という趣旨のご指摘だと理解しました。しかし「自分で考えること」は道徳的自律と動機の必要条件であると考えています。同時に、本発表が想定している人間は、『道徳形而上学の基礎づけ』や『実践理性批判』において想定されていたような理性的存在者ではなく、生身の感性に苛まれる人間であり、生まれながらにしては理性を行使できない人間です。このような人間こそ、『実用的見地における人間学』のターゲットであると理解しています。それゆえ本発表では、道徳性を実現する条件である「自分で考えること」すなわち啓蒙を成就させる手立てとして道徳的動機を前提することはできず、代わりに自然的動機に基づく思想交換を提起しています。

3) 「道徳的・自然的最高善」に関するカントの基本テーゼについて

まず、(先の回答と重なりますが、)『人間学』において想定される人間は純粋な理性的存在者ではなく、理性能力を与えられた感性的存在者です。それゆえ、まずもって人間の道徳性を前提することはできないという重要な点があります。まさにこの意味においてカント

は交際においても「自然的善」に依拠せざるをえないわけです。しかし、人間は単に交際に依存し、それに溺れるのではなく、同時に道德性も涵養させることができます。この点をしてカントは「道德的・自然的最高善」と呼んだのだと思われます。（なお、ご質問を誤解していたら恐縮ですが、私はここでの「道德的・自然的最高善」という表現を『実践理性批判』における最高善とアナロジカルには解釈してはならないと考えています。）

4) 「議論を遊びへと変身させる」 ことについて

ご指摘の通り、確かにカントは労働と遊びは常に交替することでお互いを保持するかのよう述べる場合があります。しかし、私は、談話の最重要な要素である議論が労働である必然性はないと考えています。まず、談話そのものが遊びであるとされている以上、その部分である議論も遊びでなければなりません。遊びの構成要素が遊びと労働である、ということは不合理でしょう。それゆえ、本発表では議論そのものを遊びとして解釈する可能性を指摘しました。また、少なくとも、議論と議論以外の遊びが緊張関係によって保持されるとしても、その議論はもはや純然たる労働ではなく、六つの談話の規則に従った変容がなされているはずで、「世間話と冗談は遊びで、議論は労働である」、という区別はクリアカットに引かれるものではなく、「議論は労働でなければならない」換言すれば「それ自体で楽しくあってはならない」という主張としては解釈できないと考えています。